
られんたいんの妖精

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

られんたいんの妖精

【Nコード】

N6797J

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

いつの間にか私たちは忘れてしまっているようです。子どもころには妖精の姿が見えていたことを……。原因不明の高熱にうなされる幼い息子をすくうため、私と妖精たちは夢の世界へ飛び込んだのです。さあ冒険のはじまりです。（絵師であるMポムさんに捧げる作品です）

OVERTURE

この小説を、絵師のMポムさんに捧げます

だれもが大人になるにつれ、忘れてしまうようです。

子どものころには、ごくふつうに妖精のすがたが見えていたことを……。

そう、彼らはたとえばテレビや冷蔵庫がいつもそこにあるように、当たり前のもとして私たちのありふれた日常のなかへとけ込んでいました。

あるときは、早春の庭先でクロツカスの黄色い花に顔をうずめて蜜をすすっていたり、またあるときには、夏祭りの夜店で買ってもらった金魚鉢によりかかって読書していたり、あるいは、暮秋の日差しに温められたトタン屋根に丸くなって気持ち良さそうに昼寝していたり、また冬になれば、重たい雪をのせる松の枝先にちよこんと乗って、勢い良く飛び跳ねては雪しずりの音を競いあったり……。そんな彼らのすがたを、子どものころの私は当然のものとして認識し、そしてまわりにいる大人たちにも同じように見えているのだと信じて疑わなかったのです。

あの愛らしい妖精たちが、私の前から姿を消したのはいつのころでしょうか。

いいえ、彼らが消えたんじゃないかって、私のほうが妖精を見ることのできる目を、純粋な心を失ってしまったただけなのかもしれない。とにかく、結婚してママとなった今では、もう庭先で跳ね回る彼らの姿を見ることはなくなってしまったけれど、いえ妖精なんてものが本当に存在することじたいすっかり忘れているのだけれど、でも家事や育児でへとへとになって深い眠りにおちた深夜、彼らはときどき夢の中に現れては、その小さな手で私の髪をつんつん引っぱってこう囁くのでした。

「ねえねえ、遊ぼうよ。昔みたいに、みんなで遊ぼう。鎮守の杜へ行ってかくれんぼしよう。公園の砂場でお城をつくって遊ぼうよ。教会の庭で摘んできたサルビアの花を、とうきび畑の案山子の頭に挿してやったらきつと可愛いよ。むかしはよくそうやって遊んだじゃない。今だって君、ホントは遊びたくってウズウズしてるんだろ。だからさあ、またみんなと一緒に遊ぼう。……それともあれ？もうボクたちのことなんか忘れちゃったってわけ？」

そう問いかけられたとたん、私はいつも、慌ただしい日常に流されつつ心のすみに追いやってしまったあの懐かしい記憶をよみがえらせ、胸を熱くするのです。そう、すっかり忘れていたようでありつつは心のどこかでちゃんと覚えていたのです。少女時代、いつも当たり前のように見て、聞いて、触れていた、あの甘ったるいような非現実感をともしなう無垢で、そして驚きにみちた世界のことを妖精たちは、私の無意識のなかに今もしっかりと息づいていたのです。

夢の世界で、私はたちまち少女の姿に戻り、彼らに向かって微笑みかけるのでした。

「嬉しいなあ、また君たちと会えたよ」
すると妖精たちも嬉しそう羽をぱたぱたさせて、私を取り囲みます。

「なに言ってるんだよ、君が気づいてないだけで、僕らはつねに君のそばにいるんだから」

「それ本当？」

「ああ、本当さ」

その言葉に、私はまた胸を熱くするのです。

私といつも一緒に遊んでいた妖精は、三人いました。いやこの場合、三匹と言ったほうが正しいのでしょうか……？

私の目の前で腕組みしている生意気な子がマーク、すみれ色の髪にいつもターバンを巻きつけています。なにか嬉しいことがあるとその笑顔につられるみたいに背中がぱたぱたと動きます。ウス

バカゲロウのように、やわらかくて透き通った羽です。

その隣でもじもじしている、ちよっぴり太った子はイルル。サワークリームみたいな白い顔にはそばかすが浮いています。彼の羽はマークのものとは違い、オニヤンマのように大きくて立派です。その羽が太陽の光を受けると、まるでステンドグラスのように七色に輝くのです。

そして二人の頭上にふんわり浮かんだまま頬杖ついてる女の子はシャニス。ローラーカナリアみたいなオレンジ色の巻き髪を肩にたらし、ひまわりの花びらでつくったフリルつきのワンピースを着ています。彼女の羽はアゲハチョウのように優雅で、そしていつもそのゴージャスな羽をゆっくりはばたかせては、金色の鱗粉をきらきら舞い上がらせているのです。

夢の中で彼らに会うとき、私はいつも子どものころ暮らしていた田舎町の一軒家に来ています。そこには広い庭があつて、季節の草花が生い茂っています。垣根の向こうはトウモロコシ畑でした。どこまでもつづく緑とその合間に見え隠れする花穂が視界一杯に広がって私の目をうばいます。懐かしい景色に見とれていると、妖精たちはすぐにそんな私をうながして素敵な場所へと案内してくれるのでした。

そこへ行くには、まず自分の背だけよりも高いトウモロコシ畑の迷路を抜けなければなりません。それからアシの生いしげる草原を突っ切り、オタマジャクシの小川を飛びこえて、その先にあるブナの木へと分け入るのです。湿った土を踏みしめ、どこまでもつづく木の下闇を抜けるとやがて視界が開け、私たちしか知らない秘密の花園がその姿を現します。一面にラズベリーと野バラが咲きみだれ、瑠璃色の糸とんぼが頭の上をかすめる素敵な場所です。そこで私と妖精たちは、いつも日が傾くまで遊ぶのでした。

おにごっこ、かくれんぼ、だるまさんがころんだ……。ときどきマークとシャニスが喧嘩して、それを私とイルルで仲裁します。楽しくて、思わず時の経つのを忘れてしまします。でも、どんなに楽

しくても、やがて家に帰る時間はやってきます。そのとたん、私はいつの間にか大人の姿に戻っていて、申しわけなさそうに彼らに言うのです。

「ごめんね、私もうお家に帰らなくっちゃ……今日は楽しかったよ」とすると妖精たちは、その可愛らしい手で私の服に取り付いて、口々にうったえます。

「やだよ、もつと遊ぼうよ。こっちの世界で僕らと一緒に暮らそう。そうすればいつまでも遊べるじゃないか」

「そうはいかないわ」

「どうして？」

「だって……、私はもう大人だから」

私がうつむいてそう言うのと、妖精たちは朝露のように透きとおった涙をこぼして泣くのです。

「どうして、どうして僕たちのことをおいて、一人で大人になっちゃったの？」

私も一緒に泣いてしまいます。

「ごめんね」

「ねえ、どうして？」

「ごめんね」

「どうしてなの？」

「ほんとに、ごめんね……」

そこで、いつも夢から覚めるのです。

目覚めると同時に、私はいつも夢を見ていたことさえ忘れていきます。もちろん妖精たちのことも……。でもそつと頬にふれてみると涙で濡れているし、とても切ない余韻が胸のなかで渦巻いているので不思議でたまりません。自分はなぜ泣いていたのだろうか？ その理由が分からなくて、私はさらに悲しい気持ちになるのです。なにか大切なものを……。決してなくしてはいけないものをどこかへ置き忘れてきてしまったような……。

しかしそんな思いにかられながらも、私は追い立てられるように

また慌ただしい日常の中へと飲み込まれてゆくのでした。

現実の世界ではすっかり妖精たちの存在など忘れている私ですが、でもけっして寂しくなんかありません。

なぜなら妖精のかわりに天使がいるからです。

天使は、今も絨毯の上で大の字になって幸せそうに寝息をたてています。

今年で五歳になる優希です。

まるで女の子のように可愛い顔をしています。じつは元気いっぱいの子です。柔らかい髪の毛が日の光をあびると金色に輝いて、まるで天使の輪のようになるのです。

私は、この愛らしい天使にいつも癒されています。

今日も、家事のあいまにクッキーをかじりながら一休みしていると、いつのまにか彼がやってきて私の背中をわしわしと上りはじめます。そして小さな手で後ろから首に抱きついて、肩の上にあごをちゃんと乗せるのです。

「ねえママ、られんたいんってなあに？」

優希が訊きます。

「え？」

ちょうどテレビからは、バレンタインデーに向けたチョココレートギフトのコマーシャルが流れていました。私は、ついくすりと笑ってしまいます。

「それはね、大好きな人にチョココレートをあげる日よ」

すると優希は目を丸くして「おお」と歓声をあげます。

「だいすきなひと？」

「そうよ、大好きな人に、好きです、って伝えながらあげるの」

さすがに恋人とは言えません。だって優希はまだほんの子どもなのです。でも彼は「うん」と力強くうなずくと私の背から飛び降り、ぱたぱたと自分の部屋のほうへ駆けてゆきました。私はまた笑ってしまいます。なぜって、優希はきつとなにか勘違いしている

るに違いないのです。母親である私にはちゃんと分ります。そしてちよっぴり期待もしています。あの子はいつも、元気いっぱいに勘違いしては私を楽しませてくれるのです。

優希が高熱を出したのは、翌朝のことでした。

いつもはお医者さんに注射をうたれると大声で泣きだす子が、まるでお人形のようにぐったりしているので私は心配でたまりませんでした。病院から戻り、処方されたお薬を飲ませるといったん熱はひきましたが、夜になってまた四十度近い熱を出し、夫と二人であわてて救急車を呼びました。すぐに優希は入院することとなり、翌日たいせつな仕事があるという夫を家に帰し、私は着のみ着のままて病院へ泊まり込むことになりました。

お医者さんは、いまひとつ原因がはっきりしないと首をかしげています。私はもう心細くつてつい泣き出しそうになるのをぐっとこらえていました。やがて一通りの検査を終え、小児用病棟の個室へ移ってから私は心配で心配で、もう胸が張り裂けそうな思いでした。優希の眠るベッドの横で冷たいパイプ椅子に腰掛けながら、私はうなだれていました。涙がぼろぼろと頬を伝うのを止められません。

昨日はあんなに元気に駆け回っていたのに……。

小さな小さな腕に点滴の針をさし、ときおり苦しそうに寝息をたてている我が子のひたいに何度も手をかざしながら、私は知っているかぎりの神様に祈りました。

どうか優希を……私の天使をお助けください。

やがて夜は更けてゆき、私は知らず知らずのうちに、こくり、こくりと眠り込んでいたのです。

次話へつづく。

FAIRY FRIENDS

「おーい、起きろっ」

混沌とした闇の奥から、だれかが私のことを呼んでいるのです。とても可愛らしい声。鳥の声に似ているでしょうか？ もしそうならきつと極楽鳥みたいな全身虹色の羽をまとった美しい鳥に違いありません。どこか遠い異国のエキゾチックな宮殿に独りぼっちで暮らすお姫様が、淋しさを紛らわすために飼っている、お喋りな鳥……。

「もう、起きろってばあ」

「うるさいなあ、鳥のぶんざいで……。私の幸せな眠りを妨げないでくれる？ それに、どうでもいいけど髪の毛をつんつん引っぱるのはやめて」

半醒半睡の心地よい眠りを邪魔されて、私はちよつとだけ不機嫌になりました。

うたた寝をするって気持ちいいのです。もうベッドに入って本格的に寝るより断然気持ちがいい。熟睡するかしないかの、ぎりぎりの境い目に身を置く心地よさ。例えるなら、寒い冬の日に露天風呂に浸かって、そろそろ上がろうか、それとも今しばらくお湯に浸かって温まっていようか、なんてぐずぐず迷っているときの、あの時間さえ止まってしまうような幸福感。こういう身も心もトロトロにとろけてしまいそうな幸せなひとときって、できれば邪魔してほしくないものです……。

「だれが鳥なんだよー。えーい、起きろっ、ばか！」
「きゃあ」

小さな手でほっぺたをぴしゃりと叩かれ、私は驚いてがばつと跳ね起きました。目の前では妖精のマークがふんと鼻息を荒げています。相変わらずのやんちゃ坊主です。そのとなりでは、イルルが心配そうな顔つきで目をしょぼしょぼさせていました。

「ここは……？」

「やっと目を覚ましたわ」

シャニスが、嬉しそうに手を打って宙返りをしました。

私は、まだぼんやりしている意識を覚醒させるべく、ゆっくりとあたりを見回してみました。そこは、子どものころに暮らしていた田舎町の一軒家です。どうやら季節は夏のようで、庭の大きな花壇には、私の背丈と同じくらい立派なひまわりがいくつも大輪の花を咲かせていました。クマンバチが二匹、その周りを元気よく飛び回っています。空を見上げると、日に焼けた風のおいがしました。その風に乗って遠くの山や森から、ここぞとばかりに鳴くセミの声が運ばれてきます。

ふと自分の格好に目を向けると、私はいつものように少女の姿へともどっていました。小さいころお気に入りだった、ブルーデニムのサロペットパンツをはいています。サスペンダーで肩から吊るやつです。胸当ての部分には大きなポケットがあって、そこにはいつも、ママからもらったレースのハンカチと、ヨーグルト味のキャンディと、そして虫めがねが入れてあります。

私はようやく、自分が夢の世界で妖精たちに会っているんだと気づき、こみ上げてくる嬉しさに目を細めたのでした。

「やあ、みんなー。また会えたね」

するとマークが、腕組みしながらあきれた顔で言うのです。

「なにが、また会えたね、だよ。つくづく君ってやつは、のんきな子だなあ……」

「え、どうして？」

「だってさあ、今はたいへんなときなんだろう？」

「たいへん？ ……たいへん、たいへん、たいへん、たいへん、あっ！」

私は、甘い夢の世界から一気に現実へと引き戻され、胸の奥にぽっかり穴があいたような虚脱感におそわれました。そうです、今は息子の優希がたいへんなときなのです。みるみるうちに私の口がく

しゃつとへの字になり、涙が込み上げてきます。マークとイルルがあわてて両手を大きく振りしました。

「あわわ、泣かないでよ、泣いちゃダメだってば」

「だってだって、優希が……、私の可愛い天使が」

手のひらで涙をぬぐっていると、マークが私の顔を覗き込んで羽をばたばた動かします。

「じつは、そのことで君に話があるんだ」

「……え？」

驚いて目をみはる私の前で、マークがなにやら真剣な顔でイルルに目配せしました。

「おいイルル、昨日の晩のこと話してやれよ」

「うん」

イルルが、そばかすの浮いた顔を固くして私を見つめます。彼の目は、採れたてのぶどうの粒みたいに濃い紫色をしています。その目が困惑のためか、ゆらゆら揺れ動いていました。

「あのね、じつは昨日の夜のことなんだけど、僕、寝ている優希君にこっそり会いにいったんだ」

「優希に……？」

「うん、一緒に遊ぶ約束してたから」

「……」

「なぞなぞ勝負さ。今のところ僕の五勝三敗で、優希君、今度こそ僕のことを負かすつてはりきっていたんだ」

初耳です。優希も妖精たちと遊んでいたなんて。

「あーっ、じゃあときどき優希が、朝起きてからも眠そうに目をこすっているのは、あんたたちのせいだったのね！」

マークとイルルが頬を赤らめ、えへへと頭をかきます。シャニスガ、ふわりと私の肩に舞い降りて「まあまあ」となだめてくれました。

でも考えてみれば私だって子どものころは、ごくふつうに妖精たちと戯れていたわけだし、意外と私たち大人が気づかないだけで、

どこの家庭でも同じように子どもたちは妖精と友だちになり、部屋の中で、庭先で、あるいは妖精たちしか知らない秘密の場所で楽しく遊んでいるのかもしれない。

「でね……」

イルルが再び真剣な顔に戻ります。私は、黙って彼の話を聞くことにしました。

「いつものように優希君のいる子供部屋へ忍び込もうと、出窓の外にそっと降り立ったんだ……そしたらさ、部屋の中に誰か、僕より先に来ているやつがいたんだよね……」

「だれ？ 君たちと同じ妖精？」

「それが、ふつうの妖精とはちよつと違うんだな……。まあ、部屋の中が暗くってはつきりとは見えなかったんだけど」

「違うって、どんなふう？」

「あのね……」

イルルが生唾を飲み込んで、両手をぎゅつと握りしめました。私も、知らず知らずのうちに身を乗り出しています。

「下半身がね、山羊みたいだったの」

「へ？」

「あれは、きつと……」

言いよどむイルルに代わって、マークが言いました。

「間違いないよ。パンのやろうさ」

私は心臓が止まりそうになりました。

パンは妖精界の嫌われ者です。なぜって、いたずらがあまりにも度を越しているから……。

ふつう、妖精というものはみないたずら好きですが、人を傷つけたり、ましてや生命を奪うほどの悪さはしません。でもパンという名前のその妖精だけは違っていました。彼は葦笛を吹くのが得意で、その音色で子どもたちを夢の世界へと誘い込んで、迷いの森へ置き去りにして楽しんでいるのです。迷子になった子どもたちは、泣きながら出口を探しつづけ、やがて疲れ果て死んでしまうと言われ

ています。夢の中で死んだ子どもは、現実の世界でも生きてはいません。よく小さな子どもが原因不明の病気で亡くなるのは、もしかすると彼のいたずらが元凶なのかもしれないのです。

ああ、どうしよう……優希が、私の大切な子どもが。

なんだか息が苦しくなり、私は手のひらで胸を押さえたまましゃがみこんでしまいました。ショックと心細さで泣きだしそうです。今ごろ暗い森の奥では、優希があてもなくさまよいながら泣いているのでしょうか。ママー、ママー、と泣き叫びながら私のことを呼んでいるのでしょうか。そう思うと胸がはりさけそうでした。まりません。私はいったいどうしたら……。

するとマークが、力強い声で言いました。

「だいじょうぶだってば、君には僕たちがついてるんだからさ」
につこり微笑んで自分の胸をぽんと叩くのです。イルルも、うんと大きくうなずいてくれました。シャニスが私の肩からひらりと飛びたち、目の前で大きく両手をひろげてみせます。

「だからね、これからみんなで迷いの森へ優希君を探しに行きましょって相談してたとなの」

「え……、でもどうやって？」

「あなた優希君のお母さんでしょ？ だったら簡単よ」

ふふつと微笑むと、彼女はフィギュアスケートの選手みたいに、くるりんと回ってみせました。

「ここはあなたの夢の世界。そして母親の夢はね、どこかで子どもの夢とつながっているものなのよ」

「それ、ほんと？」

「ええ、本当。だからあたしたちについてきて。優希君の夢の世界へ案内してあげる」

そうです。彼らは今夜、不意に襲ってきた災難から私たち親子を救うために、わざわざ私の夢の中へ現れてくれたのです。病室のパイプ椅子にうなだれて力なく泣いている私を助けるために……。なんて頼もしい仲間たちなんでしょう。私は心の中が、希望と勇気で

満たされてゆくのを感じました。

「うん。みんな、ありがとうね」

「お礼は、あと、あと」

「そうだよ、夜が明けて、君が現実の世界で目を覚ます前に見つけないといけないんだ」

「よし、分かった」

私はスニーカーの紐をぎゅっと縛りなおすと、立ち上がって言い
ました。

「じゃあ、みんなと一緒に優希を助け出しに行こう」

「おー！」

「ついでに、いたずら者のパンをこらしめてやるー」

「れっつごー！」

さあ、冒険の始まりです。

次話へつづく。

HIPPOPOTAMUS

優希の夢へと侵入するための入り口は、とんでもない場所にありました。なんと、動物園にいるカバの口の中だったのです。

「どうして、そんなところから入るのよう」

私が涙目で抗議すると、マークが羽をばたばた動かしながら、おどけた顔で言いました。

「さあね、優希君に訊いてみたら」

まあ、にくらしい。

そういえば去年の夏、優希を連れて動物園へ行ったときのこと、彼があくびをするカバを見て、

「ねえママ、カバさんのお口って大きいね、すごいね、すごいね」

と大はしゃぎしていたのを思い出しました。それくらいカバが大のお気に入り、よくクレヨンで口のお化けみたいなカバを描いては私に見せてくれます。

「カバさんのお口のなかには、お魚の家族がすんでいるの」

本当に子供の空想というものは奇想天外で、ときに微笑ましく、無味乾燥な日々を送る私たちの心にひとしずくの潤いを与えてくれます。でもだからって、どうして優希と私の夢が、カバの口なんかで繋がっているのでしょうか。マンガみたいに勉強机の引き出しの中でも良いではありませんか……。

「ライオンの口じゃないだけ、まだましさ」

あたりまえです。

「お、ちょうど上手い具合にカバが水から上がっているぞ、さあ急ごう」

「あん、待つてよー」

今日は休日なのでしょうか、園内は親子連れの客などでかなり賑わっていました。私は、すいすい人ごみをすり抜け飛んでゆく妖精たちを必死になって追いかけます。なにせ子供の足です、見失わな

いようにするだけで精一杯でした。ときおり知らない人とぶつかりそうになって「ごめんなさい」と頭を下げます。三頭のカバが暮らすカバ舎の周りは、高さ一メートルほどの手すりぐるぐるつと囲われていました。妖精たちは、その手すりを難なく飛び越えると、風のような軽やかさでカバのいるあたりを目指してゆくのです。

どうしよう……。

一瞬躊躇しましたが、でも迷っているひまなどありません。それに昔から鉄棒は得意です。私は、いっち、にの、さんで手すりに飛びつく逆上がりの要領でぐぐつと体を持ち上げました。我ながら、なんてお転婆さんなのでしょう。それでもなんとかよじ上って手すりを乗り越えると、周りにいた大人たちの間から「おお……」というどよめきが漏れました。スカートをはいていなくて本当によかったです。しかし、たちまち飼育係のおじさんに見つかって、大声で怒鳴られました。

「こらっ、きみ、なにをやってるんだ。危ないから早く戻ってきなさい！」

「あわわわ」

私は大急ぎでカバのいる餌場の方へと走りしました。カバ舎の中は、水に浸けた堆肥のようなにおいがしました。コンクリート製の床にはところどころ糞が落ちていたので、うっかり踏みつけては大変です。水から上がったカバは、ちょうど干し草を食べ終えたところで眠いのでしょうか、さかんにあくびをしていました。ほんと、大きな口です。下あごの部分から長い牙が突き立っています。あの中へ飛び込むのかと思うとゾツとしますが、妖精たちはすでにそこを通り抜けて優希の夢の世界へと入り込んだようでした。

「なむなむなむ……」

走りながら、私はむかし死んだおばあちゃんから教わった禍い除けの呪文を唱えていました。本当はもつとちゃんとした呪文なのですが、頭二文字しか覚えていません。でもなにか困難に直面するたび私はいつもこの呪文を唱え、なんとか乗り切ってきたのです。

高校入試のときも、

「なむなむなむ……」

なんとか合格できましたし、主人のご両親と初めて対面したときだつて、

「なむなむなむ……」

まあ、可愛らしいお嫁さんだこと、と言つて褒めてもらえました。優希を出産したときだつて、

「なむなむなむ……」

私の不安をよそに、あんなに元気で可愛い男の子が生まれたのです。優希、待つてね。今ママが助けに行くから。

私が駆け寄ると、まるでそれを待つていたかのようにカバが、ぱかーっと大きく口を開きました。間近で見るとすごい迫力です。カバの体重は軽く二トンを超えているので、まさに怪獣です。なぜこのようなところへ飛び込まなくてはならないのでしょうか。飛んで火に入る夏の虫とはまさにこのこと。いえそれを言うなら虎穴に入らずんば虎兇をえずかもしれません。あるいは清水の舞台から飛び降りるでしょうか。とにかく私は、心の中で自分自身に問いかけました。さあ、覚悟はいいかしら？

いいわけないわよ、ばかあ。

「なむなむなむ、カバさん、どうか私を食べないで……」

ぎゅっと目を閉じ、私は小さな体ごとカバの口の中へ突っ込んでゆきました。

「やあ」

自分の体がカバの口に飲み込まれた瞬間、ふわっと空中に投げ出されたような奇妙な浮遊感がありました。どうやら私の体は、カバの胃袋ではなく別の世界へ飛び込んだようです。すぐに視界が暗転して周囲の景色が真っ暗になりました。その闇の中を私の体はふわふわりと漂つてゆくのです。もうどっちが上で、どっちが下だか分からない状態で、くるくるふわふわ、くるくるふわふわ、まるで宇宙遊泳するみたいに……。

しばらくして、なにやら甘い香りがただよってきました。たぶん粉ミルクの匂いだと思います。そういえば優希は本当にミルクをよく飲む子でした。どんなにグズっていても、哺乳瓶を食わせさせるといつもびたつと泣き止むのです。それを見た母が、私の小さい頃にそっくりだと言って笑っていたのを覚えています。甘い香りの次は、どこからか楽しそうなハッピーバースデーの歌が聞こえてきました。おそらくは主人と私の声でしょう。優希が嬉しそうにふうつとロウソクの火を吹き消す姿が目に見えそうです。それにしてもここは一体どこなのでしょう。優希の思い出の中でしょうか？ そんなことを考えていると、今度はコトコトと野菜を刻む音がしてデミグラスソースの匂いが香ってきました。私の作る料理の中で、優希が一番好きだと言ってくれたハンバーグの匂いです。ファミリーストランで食べるハンバーグよりママの作ったやつの方がずっと美味しい、ですって。まったく褒めているんだか、そうじゃないんだか……。

くすつと苦笑いしていると、突然、私の体が重力を取り戻し、がくんと落下する感覚に襲われました。

「きゃあ」

と同時に目の前がぱあつと明るくなって、気がつくと私は公園の砂場の上に投げ出されていました。どうやらお尻から落ちたようで足がしびれて動けません。おまけに口の中へ砂が入ったみたいで、舌の上にざらざらした苦みが走ります。

「ぺっぺっ、ひどいなあ、もう……」

目の奥で星がちかちか瞬いています。腰をさすりながらようやく体を起こすと、イルルが心配そうに私の顔を覗き込みました。

「……だいじょうぶ？」

「大丈夫なわけないでしょ、もう、みんなしてどんどん先へ行っちゃうんだから」

「ごめんごめん。でもどうやら無事、優希君の夢の世界へ入れたようだよ」

私は立ち上がった、あたりを見渡してみました。どうやら優希を連れてよく遊びに行く近所の公園のようです。実際よりかなり広く感じるのは、子どもの視点から見ているせいでしょうか。

「ふーん……、どんなに凄いとこるかと思っていたら、案外ふつうの世界なのね」

でも通りへ出たとたん、私は仰天してしまいました。だって建物ほとんどが、なんとブロックで出来ているのです。赤や青や色とりどりのブロックで作られた高層ビルが、まるで美術館のオブジェのようにそびえ立っています。見るからに不安定でヘンテコな形をしています。倒れてきたりはしないのでしょうか。巨大なブロックのかたまりに押しつぶされる様を想像してゾッとしていると、今度は、これもブロックで作られた三階建てのバスが走ってきました。

オモチャ屋さんで、クリスマスプレゼントには何が欲しい？ と訊ねたら優希がまよわず指差したものです。運転手はどうやら人形のように、なんだか運転がぎこちない……と思っていたら、交差点でハンドルを切り損ねてお弁当屋さんの店先に突っ込んでゆきました。がっしやーん！ とんでもない世界です。

私が呆氣にとられてぼかんと口を空けていると、シャニスがアゲハチヨウの羽を、まるで合わせ貝のようにぴたっと閉じて言いました。

「ね、ちょっと聞いて。葦笛の音がするわ……」

イルルも目を閉じて、耳をそばだてます。

「ほんとだ、あっちの方角から聞こえているよ」

彼が指差す先を見つめ、今度はマークがうなずきました。

「うん、僕にも聞こえる。パンのいる迷いの森はあっちだ」

私も、目を閉じて注意深く耳をすましてみました

まず、せわしいクラクションの音、そして街角の雑踏、だれかの

話し声……。

ひゅるる、風の音……。

あ……。

聞こえてきました。私の耳にもはっきりと聞こえるのです。パイプオルガンで鳴らしたような美しい音階が……、童心をとらえて離さない楽しいメロディが……。パンフルート　いたずら者のパンが吹き鳴らす美しい葦笛の音です。

「よし、みんな行こう」

私は、力強くうなずきました。

どうやら日も、いくぶん西の方へ傾いたようです。

次話へつづく。

HIPPOTAMUS (後書き)

本当はバレンタインデーに完結させる計画だったのですが……Mポムさん、ごめんなさい！

A S P I T E F U L B O Y

ブロックで作られた巨大なお城を三つほど越えてゆくと、急にあ
たりの景観がひっそりとしはじめました。人通りは絶え、建物も消
え、電柱のかわりに太い樫の木がそびえ立って、湿った土と落葉の
匂いが立ちこめています。風が吹くたびに木がざわざわと音を立て、
葉のさやぐ音のあいまに、ぴいーっ、ぴいーっ、ききききっという
鳥のなく声が聞こえてきます。覆いかぶさるように生える木々に邪
魔されて、日はうつすらとしか射し込みません。その薄暗い道を、
草をかき分けかき分け、私と妖精たちはぐんぐん進んでゆきました。
「どうやらパンのいる森は、もうすぐそこみたいね」
シャニスが、ひらひら羽を動かしながら言いました。もう耳をそ
ばだてなくても、パンの吹き鳴らす笛の音がはつきり聞こえてくる
のです。

びるろろん びるろろん

きれいな音です。

パンの持つ葦笛は、もともとシュリンクスという名前の水の妖精
だったといえます。それを、いたずら者のパンが魔法をかけて笛の
姿に変えてしまったのだそうです。だから彼の吹く笛は、楽しいな
メロディとは裏腹によく聞くとなんだか物悲しい響きがあります。

びるろろん びるろろん

「あれ？ 帰り道がなくなっているよ」

イルルが後ろを振り返って言いました。

「あ……」

私も振り向いて、思わず声をあげてしまいました。そうです、今
まで歩いてきた道がきれいさっぱり消えているのです。

「どうやらボクたち、もう迷いの森へ入っちゃったみたいだね」

迷いの森……正式な名前はプシケの森というのだそうです。こ
こへ来るまでの道すがらマークが教えてくれました。パンが、魔力

を使って他人の夢の中につくり出した森。けつして出口の見つからない森。その森で、迷い込んだ夢の住人は泣きながら出口をさがしつつづけ、やがて疲れ果て死んでしまうと言われています。なぜ、そんなひどいことをするのでしょう。しかもここは優希の夢、私の可愛い天使が見ている、無邪気な夢の中なのです。

「ねえ、みんな。このままだと私たちまで迷子になるんじゃない？」

なんだか少し不安になって私が訊ねると、シャニスがくると宙返りしてから言いました。

「だいじょうぶよ、あなたは元々この夢の住人じゃないわ。だから目が覚めると同時に現実世界へと戻ってしまうのよ」

イルルが後をつづけます。

「うん、だから優希君を見つけたらぎゅっと抱きしめて離さないでその状態で僕らが君のことを目覚めさせてあげるから」

すると、どこから取り出したものか、マークが鋭い針を手に持つてほくそ笑みました。

「そうそう、これで君のお尻をぶすーっとね」

「な、なによそれ……？」

「スズメバチの針さ。これで刺されたらもう痛いなんのって、あまりの痛さに驚いて目を覚ますことうけ合い」

「えー、いやよそんなの」

私は、まだ刺されてもいないのに自分のお尻を押さえて身震いしました。あんなもので刺されてはたまりません。優希を見つけたら、自分でほつたをつねって目を覚まそうと固く心に決めました。

それから私たちは、どれくらい森の中を歩きつづけたでしょうか。パンの笛はもうすぐ手がとどきそうなくらい近くから聞こえているのに、いつこうに姿が見当たりません。それどころか私たちは、さつきから同じところをぐるぐる歩き回っているような気がしてならないのです。いつもは陽気な妖精たちも、さすがにげんなりした様子でした。

「あーあ、お腹へったなあ……」

イルルが飛ぶ氣力を失い、風にへろへろ流されながら言いました。そういえば私たち、朝から何も口にしてません。シャニスが、ローラーカナリアみたいなオレンジ色のくるくる巻き毛をかきあげて、ふうとため息をつきました。

「ちよつと休みましょう。こう飛びっぱなしじゃ、あたしの自慢の羽が痛んでしまうわ」

ちよつど木の切り株があつたので、私はそこへ腰を下ろすことにしました。妖精たちも思い思いの場所に羽を休めます。

「あ、そうだ」

私はサロペットパンツの胸ポケットに、ヨーグルト味のキャンディが入れてあることを思い出しました。

「ちよつど四つあるわ、みなで食べましょう」

「お、いいね」

「だから君って素敵さ」

妖精たちは乳製品が大好きです。ミルクはもとより、チーズ、バター、アイスクリーム、とくに甘酸っぱいヨーグルトは大のお気に入り。みな嬉しそうに顔をほころばせると、丸いキャンディを両手に持って、ぺろぺろかりかり食べはじめました。

すると、そのとき

「ほう、美味そうなもん持ってるじゃねえか」

とつぜん私の背後で、ハスキーな男の子の声がしました。振り向くと、むかし家で飼っていた柴犬くらいの大きさの妖精が、ぺろつと舌なめずりしながらこちらを見ているのです。

パンだわ。

上半身は男の子で、下半身が山羊、頭からは、先っぽがくると丸まった二本の角を生やしています。彼は、ぴょこんと前足を持ち上げて竿立ちになると、そのままちんちんする犬みたいに蹄をそろえて言いました。

「俺様にも一個くれよ」

「あーっ、とうとう見つけたわ。あなたね、優希を連れていったの

は？ さあ、あの子どもがどこにいるのか教えてちょうだい」

私がそう問いつめても、彼は平気な顔でうそぶきます。

「さあ、そんなやつ知らねえな」

すると一番気の強いシャニスがやって来て、腰に手を当てふんと息巻きながら言いました。

「そうやって悪さばかりするから、いつまでたつても嫌われ者なのよ。いくら友だちがいなくて退屈だからって、森の中へ子どもを引っぱり込むのはもう止めなさい」

「うるさい、うるさい。ここは俺様の森だぞ、気に食わないことがあるんだつたらさつさと出ていけ」

パンは怒って、どこからか大きなハエタタキを取り出すと、それをぶんぶん振り回しはじめました。

「きゃーっ」

「あぶない」

シャニスをかばおうとして、マークとイルルが彼女の前へ飛び出します。マークは、ぱちん！ ほっぺたを叩かれて、へろへろぼつとんと地面に落っこちました。イルルも、ぺちん！ お尻を叩かれて、えんえんとベそをかいています。私は、あわてて言いました。

「ちよつと乱暴はよして」

そしてキャンディをパンの前にさし出しました。

「これをあげるわ。だから優希のこと返して、お願い」

でも彼は、それをぽいつと口の中へ放り込むと、がりがり噛み砕きながら言うのです。

「うん、美味い美味い。でもこれっぽつちじゃダメだな。もっと美味しいもんいっぱいよこしな。そうしないとあのチビの居場所は教えてやらないぞ」

私は思わずむかーっときて、腕を振り上げそうになりましたが、でもここで彼とケンカするのは得策ではありません。どこかへ逃げ込まれでもしては、また探し出すのに骨が折れるし、それに彼は強力な魔法を使うと聞いています。うっかりその魔法でカエルやブタ

の姿に変えられてはたまりません。かといって私はもう食べ物を持つていないし、さてさてどうしたものか……。

途方にくれて、何気なくポケットに手を入れた瞬間、私はあるイタズラを思いつきました。とっても悪いイタズラ……。でもイタズラ好きのパンをこらしめるには、これくらいがちょうどいいかもしれません。

「ねえ聞いて、私もう食べ物を持っていないんだけど、その代わりにこれをあなたにあげるわ」

そう言って、虫めがねをさし出しました。おばあちゃんが針に糸を通すときなどによく使っていたもので、フレームがぴかぴかのステンレスで造られたかなり立派なやつです。パンは、その虫めがねを受け取ると、怪訝そうな顔つきで眺め回しました。

「なんだこりゃ？ いったい何に使うもんだい？」

「その透明なレンズの部分を通して、色んなものを眺めてごらんなさいな」

私が言うと、彼はその虫めがねを使って色々なものを覗き込み、そして「うおう！」とか「すげえ！」とか驚嘆の声を漏らしました。「こいつはすげえや！ 小さいものがなんでも巨大に見えちまう。ふむふむ、アリンコってのはこういう顔をしていやがったんだな」しめしめ、どうやら彼は虫めがねが気に入ったようです。そこで私は言いました。

「ねえ知ってる？ それを使うとね、とってもきれいなものが見られるのよ」

「ほう、そりゃいったい何だい？」

私は、空をびしっと指差して言いました。

「お日様よ」

「へー」

「その虫めがねでお日様を見てごらんなさい。まるで万華鏡を覗き込んだときのように太陽光線が七色に渦巻いて、すっごくきれいなんだから」

「そりやすげえな、よし、どれどれ……」

彼は、木漏れ日の射し込んでいるあたりへ移動すると、夏空からぎんぎんに照りつける太陽を虫めがねごしに見上げました。とたんに悲鳴をあげて地面を転げ回ります。

「ひーっ、ひーっ、目が痛い、目が痛いよー」

そうです、虫めがねは凸レンズなので光を一点に集めてしまうのです。だから太陽なんか見たりしては大変、目を火傷してしまうのです。

「痛いよー、たすけてー」

泣き叫ぶパンを、えいっと取り押さえて私は言いました。

「悪いことばかりしているから、こういう目に遭うのよ。これからのもう、森へ子どもを誘い込んだりするのには止めなさい。いいわね？」

「ひーっ、分かったよ、約束する。だからたすけて」

「よし、ぜったい約束だからね」

そう念を押してから、私はレースのハンカチを取り出し、彼に訊きました。

「いま目を冷やしてあげるわ。この近くに小川の流れているところはない？」

「そ、その竹笹が生い茂ってるあたりの奥に、泉がわいてるはずさ」

「うん、分かった」

私はシャニスにハンカチを濡らしてくるよう頼むと、もう一度パンを聞いたきました。

「で、優希はどこにいるの？」

すると今度は、泉とは反対の方角を指差して言いました。

「この先をずっと歩いてゆくと、ばかでっかい栗の木があるんだ。あのガキは、さっきまでそのあたりをウロチョロしていたぜ」

私はパンを妖精たちに預けて、言われた方角へと駆け出しました。

優希、待っててね、今行くから。

次話へつづく。

A SPITEFUL BOY (後書き)

次回、最終話。乞うご期待！

FINAL

パンの言っていた栗の木は、すぐに見つけることができました。

だって本当に大きいんですもの。幹の太さなんて、ゆうにドラム缶三本分くらいはあるでしょうか。古くって、威厳があって、そして大地にどっしりと根を下ろした立派な木です。その太い幹からは、まるで巨大な日傘のように枝葉がひろがって空を覆いかくしていました。夏なのに、木陰に入るとなんだかひんやりとします。ツタの絡まった根元にはリスが二匹いて、がじがじと木の実を食べていましたが、私が近づいてゆくと驚いたように立ち上がり、ちよいちよいちよいと幹の高いところまで駆け上ってゆきました。

「ゆうきいー、ゆうきいー、どこにいるのー？」

私は、その栗の木から半径百メートルくらいまでを、くまなく探しまわりました。でも、どこにも優希の姿は見当たりません。どうしたのでしょうか。もうこの辺りにはいないのでしょうか。どこか別の場所を当てもなくさまよっているのでしょうか。ママ、ママ、と私のことを呼びながら泣いているのでしょうか。もう太陽は、西の空とその下にひろがる稜線の境目くらいまで下りてしまっています。あと一時間もしたら日没がはじまるでしょう。いったい私は、どうすれば……。

途方にくれながらふらふら歩いていると、例の栗の木に大きなウロが空いているのを発見しました。人ひとりがすっぽり入れるくらいの大きさです。まさかと思い中を覗いてみると……いました！優希です。びっしりと敷き詰められた枯葉の上でころんと丸くなって、すやすや寝息を立てているのです。なにか楽しい夢でも見ているのでしょうか、ときどきにこつと笑顔になったりします。ああ、なんて可愛い寝顔でしょう。ほんとうに天使のよう……。

「こんなところにいたのね。優希ってば、起きてよう」

私がその小さな肩をつかんでゆり起こすと、彼は眠い目をこすり

ながら頭をもたげました。

「……うーん、おねえさん、だあれ？」

まだ半分夢の中にいるのでしょうか、頭がふらんふらん揺れ動いています。

「あなたを迎えにきたのよ、さあ私と一緒に帰りましょう」

「……ここは木のおいがしてとっても気持ちいいの。もうちょっと寝かせて」

今にもくつつきそうな瞼を一生懸命持ち上げて、そんなことを言うのです。まったくしょうがない子。私は苦笑しながら言いました。
「今夜の晩ご飯は、優希の大好きなハンバーグよ」

「はんばーぐ……」

眠気と食欲を秤にかけて、どうやら食欲のほうを選んだようです。彼はごそごそとウロの中から這い出てきました。その小さな体をつかまえて、私はぎゅっときつく抱きしめました。

「もう、心配ばかりかけて、本当に悪い子なんだからあ……」

今まで必死にこらえていた心細さや、ようやく優希を見つけたことへの安堵からか、涙がぼろぼろと溢れ出すのを止められませんか。無事でよかった。もう二度と会えないかもなんて思ってしまった。

胸いっぱい我が子のおいを吸い込んで、その存在をひしひしと確かめます。良いにおい……、ママだけにしか分からない、この子のおい。そつと目を閉じて、いまこの瞬間がもたらしてくれる幸福をじっくり噛みしめます。そんな様子を彼は不思議そうに見ていました。やがて私の胸に顔をうずめると、再びすやすやと寝息を立てはじめました……。

そのときです。こつん、ふいに何か硬いものが私の頭にぶつかりました。なんだろうと思ひ草の上に転がったそれを拾い上げると、あめ玉でした。なぜこんなところに？ 不審に思い、そつと頭上を見上げてみると……。

「え、なによこれ？」

ビスケット、キャンディ、シュークリーム、ゼリービーンズ、マ

シュマロ……、頭上に大きく張り出した栗の木の枝という枝に、まるでクリスマスツリーの飾りつけみたいにかくさんのお菓子がぶら下がっているではありませんか。みんな優希の大好きなものばかり。なんてことでしょう。うふふ、私は涙をぬぐいながら、こみ上げてくる可笑しさに目を細めました。そうです。ここは悪い妖精のつくり出した森である以前に、優希という想像力豊かな少年が見ている夢の中なのです。無邪気で、食いしん坊で、ときどき変な勘違いをやらかしては私のことを笑わせてくれる、そんな可愛い息子が見ている夢……。なんて純粹で、なんて儚くて、そしてなんて愛らしいんでしょう。彼がやがて大人になったとき……ちゃんと自分の歩むべき道を見つけて私の元から巣立ってゆくときに、もう一度今日ここであったことを話して聞かせることにしましょう。そしてあなたには、こんなに素敵な魔法を使う力があつたのよって教えてあげることにしましょう。そう心に決めて、私はもう一度、彼のことを思いつ切り抱きしめました。

まさにその瞬間です。

「いまだ！ えいつ

」

「ひっ

とつぜん、私のお尻に強烈な痛みが走りました。あまりの痛さに体中からぶわつと汗がふき出します。涙もこみ上げてきます。びっくりして後ろを振り返ると、マークが、きししと笑っていました。イルルもちよつと困った顔で笑っています。シャニスが手を打って二回宙返りをしました。

まさか。私は、おそろおそろ自分のお尻へ目を向けました。

ああ、やっぱり！ スズメバチの針です。マークが私に見せびらかしていたあの恐ろしいスズメバチの針が、深々と私のお尻に突き立っているのです。

「痛あーいつ、あんたたちっては何てことすんのよう」

そうです。彼らはじつと物陰にかくれながら私たち親子の様子をうかがい、この瞬間がやって来るのを今か、今かと待ち構えていた

のです。

「これで元の世界に帰れるよー」

「バイバイ、また遊ぼうねー」

「今度こそ優希君のこと離さないでー」

なごやかに手を振る妖精たちの姿が涙でかすんで、やがて見えなくなるまで私は泣きながらお尻をさすっていました。ちょっと堪え難いような痛みです。はつきり言って死にそうです。去年、虫歯の治療をしたときより十倍くらい痛いです。きっと彼らは、私のお尻に針を刺すことをはじめから計画し、ずっと楽しみにしていたのでしょう。やはり妖精という生き物は、みんないたずらが大好きだったようです。

「もう、最悪うーっ!」

がばつと身をおこすと、そこは病室の中でした。パイプ椅子が、ぎしぎし音を立てています。どうやら夜は明けたようで、閉じられたカーテンのすき間からやわらかな日差しがすーっと斜めに射し込んでいました。

まず私の目に飛び込んできたのは、優希の顔でした。心配そうな表情で、じつとこちらを見つめているのです。

「……優希?」

「あ、ママ、やっと起きた」

私は慌てて腰を浮かせると、急いで彼のベッドへ歩み寄りました。

「あなた、もう熱はないの? 苦しくない?」

「うん、だいじょうぶだよ」

そつと額に手を当ててみます。どうやら熱はすっかり引いたようでした。

「ああ、よかった……。一時はどうなることかと」

私は、パジャマの上から彼の小さな肩を抱きしめました。救急車に乗ってここへ来たときには、もうどうして良いのやら分からず、ただ涙ぐみながら神様にお祈りしていましたが、もう大丈夫のよう

です。きっと神様が私の願いを聞きとどけて下さったのでしょう。

さあ、先生に診ていただいたら一緒にお家へ帰りましょう。ちゃんと治ったら、優希の好きなもの何でも食べさせてあげるからね。私は、息子の頭を優しくなでながら、汗ばんだおでこにそっと口づけしました。

と、そのとき、私は彼のやわらかな髪に黄色いパンくずのようなものが付いているのを発見しました。

「なにかしら？」

そつと指でつまんで見ると、どうやら落ち葉のかけらのようです。ベッドで寝ていたはずの優希の髪に、なぜ落ち葉なんか付いているのでしょうか？

不思議に思って首をかしげていると、彼が遠慮がちに私を見上げて言いました。

「あのね、ママ……」

「え、なあに？」

私は考えるのを止め、ベッドにそつと腰を下ろすと覗き込むようにして優希と目線を合わせました。

「うん？」

すると彼はにっこり笑って、いきなりグーで握った右手を突き出すのです。

「はい、これ」

「え？」

驚いている私の鼻先で、彼はゆつくりとその小さな手を開いて見せました。そこには、なんと銀紙に包まれた一粒のチョコレートが乗っていたのです。

「だって、きょうは、られんたいんでしょ？」

彼は微笑みながら言いました。

「あのね、ぼくね、ママのこと、とっても好きなの。だからね、ママにどうしてもチョコをあげたいなって思ったの」

「……」

私は今、いったいどんな表情をしているでしょう。驚きと、喜びと、照れくささと、愛しさがごちゃまぜになった、とっても変な顔をしているに違いありません。

「えーん、なんて可愛いやつなんだ、お前は！」

私はもう一度、優希のことを思いつきり抱きしめました。そして頬つぺたにぶちゅーっとキスをします。彼は驚いて「やー」と言いながら身をよじっていました。しかしすぐに私を見てこんなことを言いました。

「あのね、ぼくがチョコレートほしいなって思ってたら、へんな妖精さんが現れて、お菓子の木のあるところまで連れてってくれたんだよ」

あ！

その話を聞いた瞬間、いつも目覚めると同時に忘れてしまう妖精たちとの記憶が、まるで閃光のように頭の中でフラッシュバックしました。

やんちゃ坊主のマーク。

顔にそばかすのあるイルル。

お洒落で気の強いシャニス……。

そうです、今こうして優希をこの腕に抱きしめることができるのは、すべて彼らのおかげなのです。無力な私のために夢の世界を案内してくれて、悪い妖精とも一緒になつて戦ってくれた、素敵な仲間たち……。なのに私は、彼らにお礼を言うことすら忘れていました。なんてことでしょう。こんど会ったら必ず今日のお礼を言わなくちゃ。「みんな君たちのおかげだよ、ありがとう」と言つて、またヨーグルト味のキャンディをご馳走してあげなくちゃ。ぜったいに、ぜったいに……。

感動でじわーっと涙ぐんでいると、ふいに優希が口を開きました。

「そうだ、ママ、きいて。あのね、ぼくが森のなかで寝てたらね」

「……え？ うん」

「知らないおねえさんがきて、ぼくのこと起こしてくれたんだよ」

「……」

私は思わず苦笑してしまいました。そのおねえさんっていうのは、じつはママだったんだよ、なんて口が裂けても言えません。だって恥ずかしいじゃないですか。自分の少女時代の姿を、息子に見られただなんて。

でも、ふと考えてしまうのです。もし私が、子どものころに優希と出会っていたなら、ふつうの男の子と女の子として知り合っていたなら、彼は私のことをどう思ったでしょう？　もしかして、恋心を抱いたりなんかしたのでしょうか？

ちよつと探りを入れてみました。

「ねえ、優希……。そのおねえさんって、可愛かった？」

すると彼は、人差し指を口にあて「んーとね、んーとね……」と考え込んでいましたが、やがてにこつと笑いながら言いました。

「日に焼けて、まつ黒だった」

……まだ、お世辞を言える年頃ではありません。

その年の夏、私は実家で法事をすませるため、久しぶりに父母の暮らす田舎町の一軒家を訪れました。そこには懐かしい場所があります。そうです、幼いころ妖精たちと戯れていたあの庭です。園芸好きの父がよく手入れをしているせいで、花壇に咲きこぼれる季節の草花は、今もあの頃のままの瑞々しい姿をたもっていました。でも庭からの眺めはすっかり変わってしまったようです。トウモロコシ畑は自動車学校の教習コースになっていたし、アシの生い茂る原っぱやオタマジャクシの小川も、今ではホームセンターやスーパーマーケットの建ちならぶショッピングモールへと姿を変えていました。

妖精たちは、あれから私の夢には現れてきませんでした。ぜひとも、ひとことお礼が言いたかったのですが、どうやらその願いは叶わぬようです。優希は、今でも彼らと遊んでいるのでしょうか。訊ねてみても、うふふつと笑い、「それは、ぼくたちだけの秘密なの」

と言って教えてくれないのです。

夏の日差しが、庭に咲きこぼれるヒマワリの花びらを鮮やかなオレンジ色に輝かせていました。

私は、ふと思いついて、コンビニで買ってきたヨーグルト味のキヤンデイを小皿に盛り、それを庭のかたすみにそっと置いてみました。我ながらバカなことをするものです。妖精たちは、もうここにはいないのに……。

でも翌朝見ると、小皿の中身は、きれいさっぱりなくなっていました。

終わり。

FINAL (後書き)

お読みくださり、ありがとうございました。

今回はMポムさん母子の可憐なイメージを表現するために、ちょっと児童文学っぽくしてみました。もし本物のMポムさんにお会いしてみたいという方いらっしゃいましたら、ぜひ下記リンクより彼女のブログページ『あいまいみつくす』の方へお立ち寄りくださいませ。キュートでコケティッシュな、Mポムさんオリジナルのイラスト(パンチラ有り!)もたくさんアップされてますよ(^

ー ^)
でわでわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6797j/>

られんたいんの妖精

2010年10月8日15時24分発行